

# はじめに

本報告で取り上げた“ME技術学習パッケージ教材”の作成は、本文でも説明されているように、昭和62年4月に労働省が発表した産業構造の変革に対応するための「緊急職業能力開発対策」として、短期間にME技術の習得を可能とする教材を開発するという方針に基づいている。当研修研究センター開発研究部でも、生産の現場で制御技術に従事する人材の育成を目的に、学習者にとっても自学自習を可能とし、また教える側にとっても効果的に教えることのできるこれまでにない新しい教材を開発することとしたのである。

その背後には市販の文献、参考書の多くがそのままでは教材として使用しにくく、訓練の現場に適した教材であるとはいいがたいこと、またそれに対処すべく作成された指導員による自作の教材もその多くは教科書教材（テキスト教材）のみを開発の対象としており、学ぶ側にとっても、教える側にとっても必ずしも満足されるものではなかったという事情がある。

こうした問題を踏まえて、関係者の間では教材を複合的に取りあげ、学習の効率を図ることが試みられていた。しかし、それも主として教科書教材とそれに関連する実習器とを組み合わせるといふ、二つの教材の複合化が主体であった。開発研究部ではこの複合化をさらに発展させ、新しい理念で教材を開発することの可否について検討を重ねた。その新しい理念とは従来、教材の主体であったテキスト教材、実習教材に加え、映像補助教材（バーコード対応レーザーディスクまた「PC制御」にあってはパソコンCAIソフト）を含む三つの種類からなる教材、すなわちパッケージ化された教材の開発に取り組むことであった。映像教材は人間の五感を有効に活用しようとするものであり、これの有効性は、既に教育学の専門家の間では研究が重ねられていたが、職業訓練の場でははじめて試みられたものといえよう。そのために設置された委員会の名称を「ME技術学習パッケージ教材作成委員会」とした理由はここにある。

教材の開発は一般に企画立案から訓練の現場における試行を経て実用化されるまでにはかなりの時間と労働を費やすものである。この教材開発のプロジェクトでも一つの教材を開発するにあたって調査、開発、試行という手続きを経ているが、それにはそれぞれ各一年づつが費やされ、調査から完成まで一つの教材の作成に三年の年月を要している。それでも「ME技術学習パッケージ教材作成委員会」で6種類の教材を比較的短い期間で作成し終えることができたのは、一つの教材の開発と並行して次の教材開発のための調査が行われ、また試行と並行して次の教材の開発が行われるという無駄のない計画が支障なく実行されたからであると考えている。そして、それを可能としたのは、作成のノウハウを次年度の計画に生かすよう努力したことにもよるが、なによりもこのプロジェクトに参加していただいた延べおおよそ70名の方々のご支援があったからであると考えている。

教材のパッケージ化という新しい概念に加え、制御のプロセスを学習させるという一つの目的のために6種類の教材を系統的に開発するという、キメのこまかい計画が実行されたということも従来の教材開発にない企画として特筆されることであるが、その教材の開発に、雇用促進事業団立の訓練施設関係者をはじめ民間の訓練施設関係者、公共訓練施設関係者等延べ70余名の専門家のご支援を得て開発されたということも特筆されてよいことである。

パッケージ化された教材の作成はわれわれにとってすべて新しい経験で、ある意味で試行錯誤の積み重ねであったが、作成された教材は一定の評価を得ることのできるものであり、ここに新しいタイプの教材の作成に一つの指針を得ることが出来たと確信している。それゆえに、開発の過程で得られたノウハウや開発の記録をまとめることは今後の教材開発を進めるうえで大きな意義をもっていると考えている。

この報告書は「ME技術学習パッケージ教材作成委員会」の取り組みの記録を整理したものであるが、これが刺激となって、いささかでも他の職種においてもパッケージ化された教材の開発に関心が高まることになれば幸いである。